

# インクル

第30号 2004(平成16)年5月25日

"Incl." by The Accessible Design Foundation of Japan (The Kyoyo-Hin Foundation)  
共生社会の実現を願う映画「インクル」。「包括的教員理念」を意味する英語「インクルーシブ」から名付けました。

## 目次 / Contents

共用品推進機構の平成16年度事業計画、独自の視点でCSR研究 (森川美和).....	2
「バリアフリー 2004」にADFが出展 (星川安之、金丸淳子).....	3
花王のバリアフリービデオ第5弾、「みんなで使えるかな?」が完成 (星川加奈子).....	4
随想 私と共用品 第10回.....	6
開発急がれる「利用しやすいバス・タクシー」(永井武志)	
共用品ビジネス実践講座 第6回.....	7
共用品は経済社会を支える「新たな規範」(高嶋健夫)	
キーワードで考える共用品講座 第29講.....	8
「共用品の歴史⑤ (普及期=2000年代)」(後藤芳一)	
<寄稿>障害者とボウリング.....	9
USオープン観戦記、「共用スポーツ」として半世紀超す歴史 (関口秀之)	
静岡工業技術センターが「UDのためのモノ作りシステム」を作成 (高嶋健夫)	11
<ニュース&トピックス>.....	12
新製品=花岡車輛、日本能率協会、TOTO、トヨタ自動車 (高嶋健夫)	
第13回・第14回共用品サロン=喜多川桂子さん×河辺豊子さん他 (小熊一実)...	13
新連載・鴨志田さんの談話室①：お題は「自立的バリアフリー」(森川美和).....	14
<事務局長だより>他人事に一生懸命になれる人たちと (星川安之).....	15
共用品通信・情報アラカルト	
新連載・わが社のエース：内田洋行「FEEDデスク」(高嶋健夫).....	16
奥付	



■「簡易筆談器」は聴覚障害のある人とのコミュニケーションに便利な共用品。手話ができなくても、あわてる必要はないのです。

イラスト：牧内 智子

# 共用品推進機構の平成16年度事業計画 共用品・共用サービスの視点で「CSR」研究

（財）共用品推進機構の平成16（2004）年度の事業計画が決定した。①共用品・共用サービスに関する調査及び研究、②標準化の推進、③普及・啓発、④人材育成、⑤情報の収集と提供、⑥国内外関係機関との交流と協力——の主要6事業分野ごとに多彩な活動を展開する計画である。  
（森川美和）

## ネット利用した継続的調査を準備

調査・研究事業としては、別表に示した8つの事業を計画している。このうち、「障害児・者／高齢者等の日常生活環境における不便さ等の実態把握システムの構築」は受託事業で、これまで日常生活における「不便さ調査」にご協力いただいた各種団体との連携を強化し、ウェブを利用した継続的・障害横断的調査が実施できる仕組み作りを準備する。「共用品市場高度化調査」は自主事業として継続、国内市場規模調査を実施し、時系列的にデータを蓄積していく計画である。企業の社会的責任（CSR）と共用品・共用サービス関連分野の関連調査・研究に関しては、政策支援、企業支援のあり方など幅広い視点から本格的な検討に着手する。

アクセシブルデザイン関連テーマの調査・研究、日本工業規格（JIS）原案の作成に関しては、前年度から引き続き、「アクセシブル・デザイン検討委員会」を開催。「公共物・一般製品への点字表示に関するJIS原案」と「触知図における凸表示に関するJIS原案」の作成に取り組むと共に、アクセシブルデザイン分野で新たに標準化が必要なテーマの検討を行う。

## 表彰・マーク制度を検討

アクセシブル・デザイン・フォーラム（ADF）の推進に関しては引き続き、シンポジウムの開催、関係展示会への出展など、積極的にADF事業に参加・協力していく予定である。

各企業・業界団体・関連団体が、共用品・共用

### ■共用品推進機構の平成16年度事業概要

1. 調査・研究・開発
  - (1) 障害児・者／高齢者等の日常生活環境における不便さ等の実態把握システムの構築
  - (2) 共用品市場高度化調査
  - (3) 共用品普及のための共用品データベース（DB）研究・開発
  - (4) 共創システム及びモニタリング調査システムの構築
  - (5) 無線ICタグによる障害者・高齢者配慮支援システム基盤整備事業
  - (6) 共用サービスに関する標準化に関する調査研究
  - (7) コミュニケーションボードに関する調査研究
  - (8) 企業の社会的責任（CSR）と、共用品・共用サービス関連分野の関係調査・研究
2. 標準化の推進
  - (1) アクセシブルデザイン関連テーマの調査・研究JIS原案の作成
  - (2) アクセシブル・デザイン・フォーラムの推進
  - (3) 関連機関実施のアクセシブルデザイン関連JIS原案等作成・調査研究への協力
3. 普及・啓発
  - (1) 共用品・共用サービス展示会の実施
  - (2) 2005年愛知万博での「高齢者・障害者配慮ハンドブック」作成
  - (3) 子ども向け「共用品副読本」のHPでの発展
  - (4) 共用品普及・啓発のための書籍・ビデオ企画・作成
  - (5) 表彰制度、マーク等のあり方についての検討
4. 人材育成
5. 情報の収集・提供
6. 国内・海外の関係機関との交流・協力

サービスをより利用者ニーズに合った方向で実現できるように、多様な形で情報提供を推進する。

展示会では、引き続き「国際福祉機器展」（東京ビッグサイト）と「REHA CARE」（ドイツ・デュッセルドルフ）に出展。これを柱に、各地の盲学校・ろう学校・普通学校での開催や自治体の展示会への出展協力などに取り組む。表彰・マーク制度のあり方に関しては、体制を整えて検討していく。

人材育成では、関連シンポジウムを開催するほか、今年度も企業向けに「共用品ビジネス実践講座」、個人向けに「共用品サロン」などを開催。情報提供では、不便さデータベースの整備、機関誌「インクル」の発行、ホームページを通じた情報提供など、コンテンツ強化に引き続き取り組む。

また、国内外の関連機関との交流については、今年度もさらに発展させる。海外機関との交流では、中国、韓国をはじめとするアジア各国の関連機関と協議を進め、高齢者・障害者配慮調査も計画。また、欧米諸国との連携も引き続き密にしていく。



## 「バリアフリー2004」にADFが出展 共用品、交通エコモなど5団体が共同ブース

4月22～24日の3日間、大阪・南港のインテック大阪で開催された「バリアフリー2004」（大阪府社会福祉協議会・テレビ大阪主催）に、昨年10月に発足した「アクセシブル・デザイン・フォーラム（ADF）」が初めて出展した。ADFには現在26団体が加盟しているが、今回はその幹部団体の中から、（財）日本規格協会、交通エコロジー・モビリティ財団、（財）家電製品協会、日本福祉用具・生活支援用具協会、そして共用品推進機構の5団体が参加した。

この展示会は今年で第10回を迎え、この間、高齢社会の到来、介護保険の導入などの要因が重なって年々規模を拡大、今年は約305社36団体（863小間）の出展があった。全体としては福祉機器の展示が主であるが、共用品推進機構の法人賛助会員である企業各社をはじめとして、出展企業の中では共用品的な要素を持った製品が多数紹介されていた点は、東京で開催される「国際福祉機器展（HCR）」と同様である。

初日2万9000人、2日目3万人、そして最終日の土曜日は4万1000人で、3日間で約10万人の来場者があり、関心の高まりを感じた。来場者の増加は、直前に複数の大手新聞に大きく記事として紹介され

た影響もあるだろうが、潜在的にこの分野の情報を必要としている人たちが数多くいることの現れと思われる。

私たちのブースでは、ADFの事業・活動紹介のほか、交通エコモ財団が「らくらくおでかけネット」（<http://www.ecomo-rakuraku.jp/rakuraku/index/>）と駅ホームに敷く誘導ブロックの紹介を、日本福祉用具・生活支援用具協会がパネルで団体紹介を、日本規格協会、家電製品協会が出版物の紹介を、それぞれ行った。共用品推進機構は、共用品の展示を中心に不便さ調査の概要を紹介した。

3小間のブースには、初めて共用品を知った方から、E&Cプロジェクト時代からよくご存知の方まで、幅広い来場者があった。2日目には同会場内の国際会議ホールで、経済産業省標準課の矢野友三郎課長補佐が「新しい社会のルール作りを目指して」と題して、国際的に広がっている「アクセシブルデザイン」に関する講演を行い、300名入る会場はほぼ満席となった。その後には「講演を聞いた」という方々が次々とブースを訪ねてくださり、熱気あふれる3日間であった。

（星川安之、金丸淳子）



# 『みんなで使えるかな?』が完成

## 花王のバリアフリービデオ第5弾、機構が監修

花王のバリアフリービデオシリーズ第5弾となる「みんなで使えるかな?～バリアフリーについて考えてみよう～」が完成した。同シリーズは花王と財共用品推進機構が共同制作し、学校や地域、企業でのバリアフリー教育・啓発に広く活用されており、今回の新作も機構が監修を担当している。その内容を、花王(株)広報部門社会・文化グループの星川加奈子さんに紹介してもらった。



### 「良い子のオオカミ君」が大活躍!

花王では、障害のあるなしに関わらず、誰もが暮らしやすい社会を目指して、バリアフリー社会の推

進をテーマの1つに、社会貢献活動に取り組んでいます。

その活動の一環として、財共用品推進機構と協力し、さまざまな障害を抱える人々の生活をテーマに、その理解と共有を目的とした「バリアフリービデオ」を1995年から順次、制作してきました。「見えない目で歩いた街」、「バリアフリー社会を目指して～見えない世界・聞こえない世界～」、「みんな一緒～雅士くんの一学期」、「みんなで跳んだ」の4作品です。これらを収録したビデオは、学校や企業・各種団体へ年間平均200件の貸し出しを行い、大変好評をいただいています。

このたび新たに、子どもたちにも「バリアフリー」について考えてもらいたい、身近に感じて欲しい、という願いを込めて、小学校低学年向けのバリアフリー学習ビデオ「みんなで使えるかな?～バリアフ

### ■『みんなで使えるかな?』のストーリー



- ①オオカミ君は森の嫌われ者、でも実は……。
- ②目がよく見えないおばあさんにメガネをあげたかった。
- ③足を怪我しているお友だちには車いすをあげたかった。

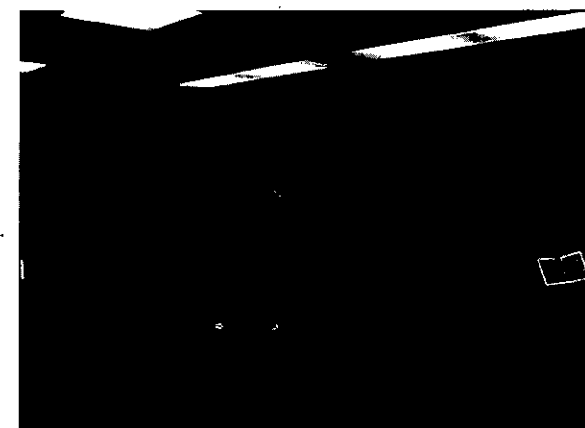
リーについて考えてみよう～」を、人形劇スタイルで制作しました。折りしも、財共用品推進機構が小学生向けの教材用小冊子『共用品って、何だろう?』を開発しており、その活動を補完するようなビジュアルテキストとして、学校の現場で活用されることを期待しています。

内容は「子どもたちがよく知る『赤ずきんちゃん』と『三匹の子ぶた』に悪役として登場するオオカミ君は、本当は誰よりもやさしい心を持っていた……」というオリジナルのストーリーで、上映時間は約23分。そのお話の中で、オオカミ君が森の仲間たちにみんなが仲良くすることの大切さや「バリアフリー」の考え方を、シャンプー・リンスの識別方法の例なども交えながら、わかりやすく表現しています。

### 14人の社員がボランティア出演

ビデオの制作にあたっては、「社員の社会活動参加」の観点から、また、社員自身に会社の社会活動をもっとよく認知してもらい狙いから、着ぐるみ人形の中身と声の出演者を社員から募集し、14名の社員ボランティアの協力を得て、制作しました。

7週間にわたって休日を返上して稽古・撮影に参加した社員からは「以前と比べて意識が変わった。日常生活の中でバリアフリーについて無意識に考えたり、探したりするようになりました」といった感想もあり、多くの社員がバリアフリーについて認識



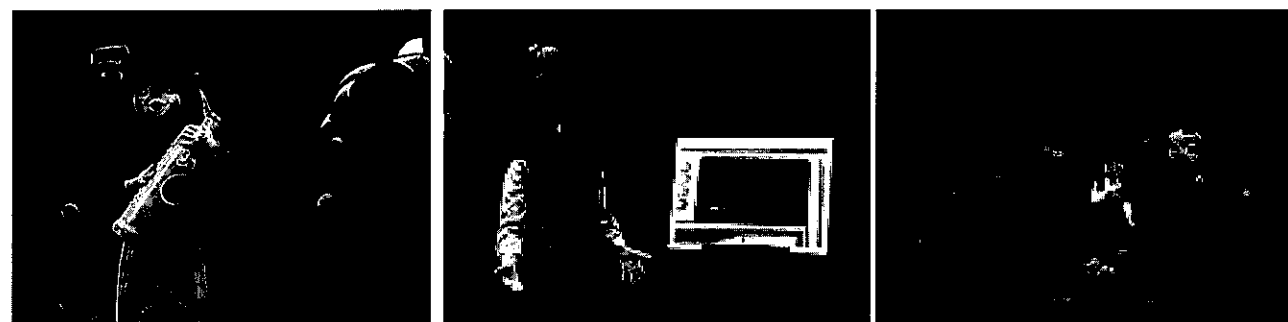
■社員ボランティアによるけいこ風景

を新たにするきっかけにもなりました。

また、ビデオの監修者として、今回も共用品推進機構にご協力いただいたほか、小学校の先生や東京都教育相談センター、東京都総務局人権部、東京都人権啓発センターの方々にもアドバイスをいただきました。

このビデオは、「道徳」の授業などでご活用いただけるよう、希望される小学校を対象に、無料で寄贈しています。お知り合いに教育関係者がいらっしゃる方は、ぜひご紹介ください。

■問い合わせ先：花王(株)広報部門社会・文化グループ (TEL: 03-3660-7057, FAX: 03-3660-7994, Eメール: kouho@kao.co.jp)



- ④⑤メガネや車いすのほかにも、「使いにくい」と感じることをなくす工夫のあるモノはたくさんあるんだね。
- ⑥オオカミ君みたいに相手の気持ちがわかれば、みんな仲良く暮らせるね。

## 開発急がれる「利用しやすいバス・タクシー」

ながいたけし  
永井武志 (共用品ネット代表、(株)プラナ代表取締役)

30年以上前、私がインダストリアルデザイン(ID)専攻の学生であった時、洗面化粧台の課題に取り組んだことがあった。洗面化粧台は家庭内で大人から子供まで一緒に使わねばならない道具の1つである。子供にとって高すぎる洗面台は、手を洗おうとすると水は手を伝わって肘まで垂れ、床や服を汚してしまう。洗面台の高さをいかに設定するか、さんざん迷い、踏み台を引き出す案などを模索した記憶がある。

今考えてみれば、これが「共用」との最初の出会であったかもしれない。IDは量産を前提として、常に使用者、生産者、流通販売者の立場に配慮しながら、その時代の価値観に合致した商品のあり方を考え、美しく仕立てる仕事であり、卒業以来ずっとこの道を歩んできた。

### UD開発に先鞭付けたE&C活動

1972年、インダストリアルデザイン事務所5社が集まり、リハビリ用具のデザイン開発を目指して「RID (Rehabilitation Instrument Design)」が結成された。RIDの活動に参加して、量産製品にほんの少しの配慮をするだけで、健常者から、高齢者、障害のある人まで、幅広い人が使いやすい道具や施設ができることを学んだ。91年にはE&Cプロジェクトとのすばらしい出会いがあり、第2回の会議から参加させていただいている。障害をものともせず活躍するメンバーとの活動に、私は元気づけられ、励まされてきた。E&Cではカード班に所属し、プリペイドカード、キャッシュカード、クレジットカードなどの触覚による識別に取り組み、現在の共用品ネットでも規格化への試みを続けている。

共用品推進機構になった現在に至るまで、E&C活動の広がりや成果は、「ISO/IECガイド71」に象徴されるように目を見張るものがある。最近の家電製品などにはユニバーサルデザイン(UD)やバリアフリーデザインを取り入れた商品が多く見られるようになったが、これに先鞭を付け、大きく貢献し

たのはE&C活動だと思っている。

個人で使用する商品はサイズや品揃えの多様化、アジャスタブル、カスタマイズの機能により、個々のニーズへの対応に細かな配慮がなされるようになってきた。公共施設においては「ハートビル法」や「交通バリアフリー法」など法整備により、駅や交通機関のバリアフリー化も進んでいる。職員による人的対応も、10年前に比べればより良い方向に向かっていると思う。

ただ、これらのUD、バリアフリーの動きが一過性の流行でなく、「もの」や「こと」の開発を考える際の基本思想として継承され、定着するまで見守る必要がある。

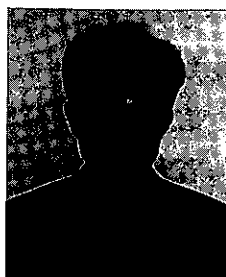
ことに、公共交通機関である低床バスやタクシーなどは、共用品・共用サービスを目的としたプラットフォーム(シャーシー)開発からデザインをし直す必要があると思う。開発には多額の費用がかかり、一企業の努力だけでは困難かもしれないが、業界をあげて取り組むべき課題ではないだろうか。

### 誰もが気軽にお手伝いできる社会に

障害者や高齢者が自立して生活できるように物理的な環境を整えることの重要性は言うまでもない。しかし、ものによる環境を整備するだけでは十分ではない。駅の切符売り場で点字の料金表を読んでいる視覚障害者に「お手伝いしましょうか?」と気軽に声をかけられる人的サポートの習慣を「誰もが」できるような社会になってほしいと願っている。

それには、幼少期に共用品・共用サービスの体験をするチャンスを作ることがどうしても必要になる。教育の一環として、今後長い時間をかけて達成すべきテーマであろう。どんなに環境が整備されようとも、最後は人の温かいサポートに勝るものはないのだから。

(題字は、中野奈津美・(財)共用品推進機構運営委員)



## 「共用品ビジネス実践講座」第6回

### 共用品は経済社会を支える「新たな規範」

(財)共用品推進機構が主催する平成15年度「共用品ビジネス実践講座」の第6回・最終講座が3月3日に機構事務局で開かれた。今回は、日本政策投資銀行課長の村上豊氏と、経済産業省標準課長・後藤芳一氏(日本福祉大客員教授)が登場した。最後に松山、名古屋など各地からの参加者を含め約30人が修了証を受け取り、全体のカリキュラムを企画・コーディネートした青木誠・機構運営委員に感謝状が贈られた。「共用品ビジネス実践講座」は16年度も内容をさらに強化して開講する。(高嶋健夫)

#### 講座⑩：村上豊氏

### 共用品が「もうひとつの切り口」に 金融機関が「共用品をIRする」と……



日本政策投資銀行(DBJ)四国支店に勤務する村上氏は本店時代から共用品ビジネスの可能性に着目。①わが国製造業の国内事業の存続、②日本社会における急速な高齢化進行への対応——という製販両面から、その背景を整理した。

製造業存続の視点では、中国国内の地域間格差を背景に低賃金労働による「世界の工業」化はまだ続く一方、環境、医療、デジタル家電分野などは今後も国内生産の優位は崩れないことを強調。人口高齢化については、東京圏など大都市部での加速度的な高齢化が今後の課題となるとした。これを踏まえて、ニッチ市場へのリスクマネーの導入、ニーズとシーズのマッチング推進によるイノベーションの実用化など、産業育成・支援の課題を指摘した。

こうした中で、DBJでは新年度から「新産業創出・活性化」融資制度を創設。「共用品は有力な融資対象分野」と説明した。また、今年2月に東京本店と関西支店に開設した「技術事業化支援センター」では、企業との共同開発・事業化に取り組むことを

紹介。最後に、今後の商品開発のキーワードとして「もうひとつの切り口」を挙げ、その切り口として「共用品が高い可能性を持つ」と訴えた。

#### 講座⑪：後藤芳一氏

### 「企業の社会的責任」の重要分野に 企業経営と共用品・共用サービス



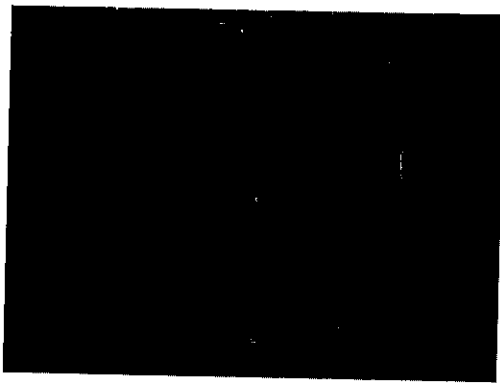
後藤氏は「企業の社会的責任(CSR)」への関心の高まりについて、現状や背景を分析。国際標準化機構(ISO)における国際標準作りの動向、

「見えない価値」を測る「社会的責任投資(SRI)」の台頭、企業を取り巻く「ステークホルダー」の概念の拡大といった多角的な視点から解説した。

この中では、国際的なCSR規格化の流れを詳細に報告。ISOでは2001年4月の理事会でフィジビリティ調査を行うことが決定し、今年6月にも技術管理評議会が今後の方針を示すとの見通しを明かした。このほか、この分野で先鞭を付けた豪州をはじめ、米英仏など先進各国の規格の概要、国連グローバルコンパクト(GP)などCSRに関する国際文書の動向なども紹介した。

そして、企業経営におけるCSRのポイントとして、①ニーズ主導社会の到来、②国際的な枠組み作りへの寄与、③独自の価値観を発見・発信、④新しい社会モデルと進路を提示——の4点を指摘。そのうえで、共用品・共用サービスへの取り組みは、①の視点では「消費者との共働によるニーズ起点の開発」、②では「ISO/IECガイド71」の発議、③ではビデオ『みんなで跳んだ』に象徴される共生社会実現への呼び掛け、④では「汎用品からバリアフリーへ、そして人権へ」という共用品の発展過程、といった点で先行していると位置付け、引き続き共用品ビジネス展開の重要性を強調した。





■障害者用の投球補助具。左が視覚障害者用のガイドレール、右がハンドルグリップボール（写真提供：スポーツマーケティング研究所）

でストライクは少ないながらも、スベアは確実にゲット。それもそのはず、右投げのW・ロイさんは最高スコア299点、公認アベ200点のAWBA記録保持者で、左投げのA・アットクトさんも公認アベ196点の名手だったのでした。

### 障害者ボウリング「8つのおススメ」

日本における障害者ボウリングの事情はどうなっているのでしょうか。(社)日本ボウリング場協会関東支部連合会が毎年発行している『障害者とボウリング』（非売品）から紹介していきます。まず、障害者にボウリングを勧めるポイントとして、①楽しく長く続けられる、②体に良い、③気分がスッキリする、④目標作りがしやすい、⑤一緒に楽しむ仲間ができる、⑥外出のきっかけになる、⑦社会性がある、⑧試行錯誤できる——の8点を挙げています。

同協会では毎年11月に三笠宮寛仁親王殿下を名誉会長とする「宮様チャリティーボウリング大会」を開催。障害者の部はプロボウラーやボランティアの協力により、健常者の部に優るとも劣らない熱戦が展開され、すでに昨年で37回の歴史を刻んでいます。



■木製、金属製など、いろいろなタイプがある「ボウリングランプ」(写真提供：同)

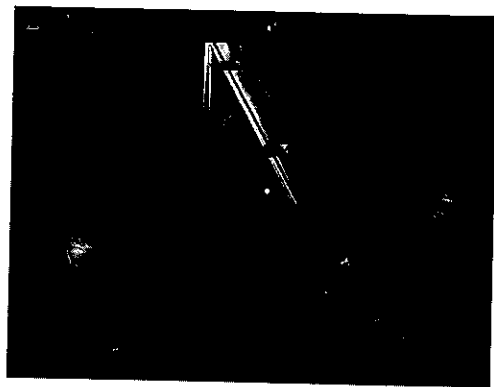


他にも、毎年2月には福岡で「全国障害者ボウリング大会」が行われ、障害の区分によりA～Kの11クラスに今年は約250人が参加しました。

また、知的障害者によるスペシャルオリンピックの正式種目としても国内外で数多くの大会が開催されており、昨年6月にアイルランドで行われた第11回夏季世界大会では、兵庫県の横山恵さん(15歳)が女子シングルスで金メダルを獲得。視覚障害者のボウリング競技も盛んで、昨年12月には東京で「第1回IBSAアジア視覚障害者ボウリング大会」が5カ国から46選手を集めて行われ、B3クラス(視力0.1以下または視野20度以下)で236点の世界最高記録がマークされています。

### 多様な投球補助具、施設もバリアフリー化

もちろん、障害者がプレーするには、一部を除いて投球補助具が必要になります。主なものでは、視覚障害者用の手すり(ガイドレール)、自力で投球できない人には投球台、スロープ、シューターなどと呼ばれる「ボウリングランプ」、また車いすの人をはじめボールをうまく持てない人のためには、投



## 『ユニバーサルデザインのためのモノ作りシステム』

静岡工業技術センターが作成・配布

静岡県静岡工業技術センターは『ユニバーサルデザインのためのモノ作りシステム』と題する企業向けの小冊子を作成、関係者に配布した(=写真は表紙)。同センターが2001～03年度の3カ年事業として取り組んできた調査・研究活動に基づく知見・ノウハウを広く提供する目的で、研究や商品開発の概要をわかりやすくまとめた内容となっている。

同センターでは、4人の専任スタッフによるユニバーサルデザインプロジェクト(研究主幹・田村久恵氏)を立ち上げ、多角的な視点で日用品・UD商品開発の手法を研究、さらに県内企業との新製品開発に取り組んできた。具体的には、筋力の衰えた高齢者や小柄な人でも座りやすい和室用ダイニングセット(商品名「座・チェア」)を起立木工(本社静岡市)と、視覚障害者でも利用し

げると同時に把手が引っ込むハンドルグリップボールなどもあります(写真参照)。

中でもボウリングランプには、軽量の木製、車輪付きの金属製、持ち運びしやすい塩ビ製など、それぞれのニーズに合ったタイプがあります。千葉県君津市の佐藤幸子さん(33歳)は先天性脳性麻痺による運動機能障害のため、軽量の木製折りたたみ式ランプを使用。ボウリング歴は13年で、マイボール、マイシューズを持ち、自分のボールの曲がり具合に合わせて投球台の向きを足を使って調整し、最高スコア232点をマークしたこともあるそうです。

『障害者とボウリング』を発行している同協会会長で、アジア視覚障害者大会の会場にもなった東京ポートボウル(東運レジャー(株)社長の池田朝彦氏は「ボウリングは子供からお年寄り、障害者も健常者も一緒に生涯楽しむことができる共用スポーツ。誰もが気軽に楽しんでいただけるよう、今後とも協会加盟センターの施設充実に努め、ボウリングを通じて福祉社会のより一層の充実を目指したい」と述

やすいガス給湯器  
用浴室リモコン  
(商品名「よくばりリモコン」)を  
高木産業(同富士市)と、それぞれ  
共同開発した。

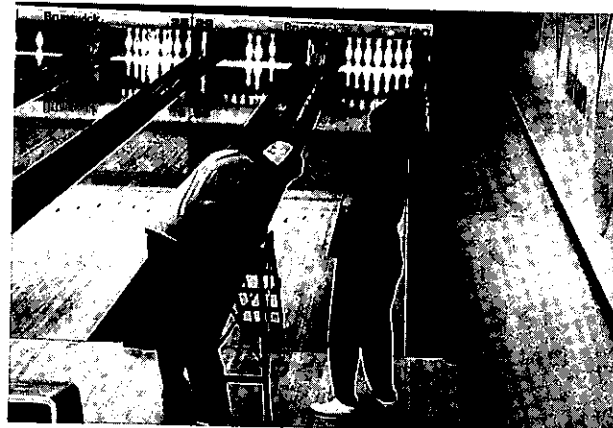
この冊子はA4判・76ページで、それらUD製品の設計コンセプトや開発に至る経緯、実際に行ったさまざまな調査・実験の概要、関連資料などを収録している。  
(高嶋健夫)

■問い合わせ先：静岡県静岡工業技術センターUDプロジェクトスタッフ(TEL：054-278-3026、FAX：054-278-3066、ホームページ：http://udp2004.jpおよびhttp://www.s-iri.prefshizuoka.jp)



べています。

上記の競技会や投球補助具などの紹介の他、各地の障害者ボウリングクラブ、ボウリング室がある公共施設、加盟ボウリング場の障害者用設備状況なども紹介している同誌2003～2004年版をご希望の方は、編集した(株)スポーツマーケティング研究所(TEL：047-473-3474、FAX：047-473-3485、ホームページhttp://tenpin-tap.com)まで。若干部数に余裕があるので、対応していただけることになっています。

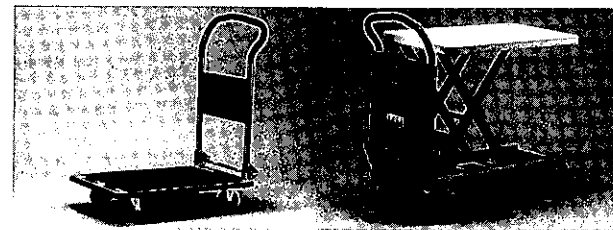


■自らのボウリングランプを使って楽しむ佐藤幸子さん

花岡車輛、「ハンドル革命」の新型台車を発売

運搬車輛・機器メーカーの花岡車輛（東京・江東区）は創立70周年を記念して、使い手に優しいユニバーサルデザイン（UD）思想を取り入れた新ブランドのハンドトラック（台車）「プレミアムダンディ70」シリーズ6機種（=写真左は「PDL-DX」）と、リフト機能付き台車「プレミアムダンディリフト70」シリーズ5機種（=写真右は「PDL-150」）を同時に発売した。

さまざまな使い手を想定し、「ハンドル」の形状などに特徴を持たせて、押ししたり、引いたりしやすく、握りやすいハンドルを実現したという。このほ



か、レバーやペダル、キャスターなどにも使い勝手を考慮したデザインを採用している。

■問い合わせ：花岡車輛東京本社（TEL：03-3643-5271代、ホームページhttp://www.hanaoka-corp.co.jp）

・福祉施設のための設備・機器展「第33回日本医療福祉設備学会併設HOSPEX Japan 2004」、「第3回学校・教育施設展2004」、乳幼児・マタニティ・託児施設関連の「第3回Baby & Kids Fair Japan 2004」の4展示会を今年から同時開催する。全体では1000社2000小間の出展と15万人の来場を予定している。

■問い合わせ：日本能率協会産業振興本部（TEL：03-3434-1988、FAX：03-3434-8076）

医療・福祉・育児を含む総合住宅展

11月に東京ビッグサイトで開催

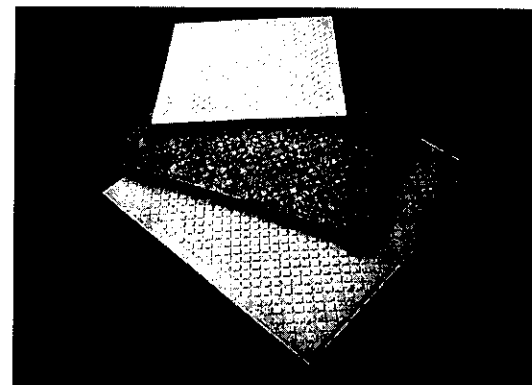
住宅・建築関連の大規模総合展が11月17～19日の3日間、東京ビッグサイトで同時開催される。

いずれも(株)日本能率協会が主催（一部共催）するもので、日本最大級の住宅・建築関連展示会の「第26回Japan Home and Building Show 2004」、医療

滑りにくい浴室専用タイル TOTOが新製品

TOTOは排水性が高く、滑りにくいUDコンセプトの浴室専用タイル「HNシリーズ200」を発売した。昨春発売した「HNシリーズ150」が好評なことから大型サイズを追加投入した。このタイルは光触媒技術などによって表面に水が残らず、滑りにくだけでなく、乾く時間も在来品の約半分となり、抗菌性も高いという（=写真上「150」、下「200」）。

材質は磁器質無釉タイルで、サイズは200角。色



は「ベーシック」が6色、「グラニット」が4色。希望小売価格は、「ベーシック」が1㎡当たり1万290円、「グラニット」が同1万920円。

製品など約400点を展示するほか、同社の福祉車輛「ウェルキャブ」シリーズ約25台を常時用意した専用試乗コーナーも併設している。

営業時間は午前11時～午後9時で、不定休。問い合わせは「メガウェブ」（TEL：03-3599-0808、ホームページhttp://www.megaweb.gr.jp）。

（高嶋健夫）

トヨタ自動車「UDショウケース」開設

トヨタ自動車は東京・青海の大規模展示場「メガウェブ」の施設を一部リニューアルして、UDの展示場「トヨタ・ユニバーサルデザイン・ショウケース」を開設した。自動車だけでなく、日用品、家電

第13回共用品サロン（3月12日）

喜多川桂子さん×河辺豊子さん、藤本康二さんがWメインで登場

【メイントークその1】

E&Cプロジェクトが行った「目の不自由な人たちの日常生活における不便さ調査」を下敷きに1993年に小学館から出版された『朝子さんの一日』。この絵本を作った元E&Cメンバーの喜多川桂子さんと、日本盲人連合会の河辺豊子さんが、制作当時の思い出とその後の社会の変化について語った。

この中で、河辺さんは「この本を書いた頃に比べ、声をかけてくれる人が増え、駅員の対応もよくなった。メール読み上げ機能付きの携帯電話が必需品になり、公衆電話を探す必要もなくなった」などと語った。その半面、駅の案内図の点字化や音声化が進んだ結果、トイレの場所を聞いた時に、「点字案内がそこにあるから見てくれ」と言われたとも。「人の対応を忘れないで！」と訴えた。

【メイントークその2】

経済産業省商務情報政策局医療・福祉機器産業室長の藤本康二さんが登場。4代目の医福室長である

藤本さんは、中小企業庁時代の経験や最近実施したシニア機器関連調査などから、「日本の企業の間には無駄な競争も多い。確かに、消費者は目新しく、変わったモノを手取るので、次から次へと変えていく。しかし、これからの高齢社会に必要なのは、よく考えられた共用品だ」と指摘。「共用品・共用サービスの考え方を大切に、メディアにももっと取り上げられるように働きかけて、企業の持つシーズを表に出していくことが重要」と語った。

【主なミニプレゼンテーション】

★「ロンドンの3カ月で見つけた『モノ』や『コト』」と題し、アイ・デザインの萩野仁美さんが現地で撮影した各種のバリアフリー設備の写真を紹介した。たった3段の階段のためのエレベーターなど、数多くのユニークな設備を見つけたという。

★新刊「ウェブメソッド革命」（小泉明正著、日経BP出版センター）を、編集・一部執筆を担当した本サロンホストの高嶋健夫さんが紹介。（小嶋一実）

第14回共用品サロン（4月9日）

バリアフリービデオ最新作をお披露目！

【メイントーク】

花王制作のバリアフリービデオ第5作「みんなで使えるかな？」について、同社広報部門社会・文化グループ部長の嶋田実名子さんと、花王映像作成(株)の渡邊知基さんが同ビデオをお披露目すると共に、狙いや苦労話などを語った（同ビデオの詳細は今号4～5ページを参照）。

【主なミニプレゼンテーション】

★交通エコロジー・モビリティ財団バリアフリー推進部の沢田大輔さんが、「第10回高齢者・障害者モビリティに関する国際会議」について案内。

★静岡県静岡工業技術センターが発行したUD開発のための企業向け小冊子を紹介（11ページを参照）。

★沖電気工業が設立した特例子会社、沖ワークウェ

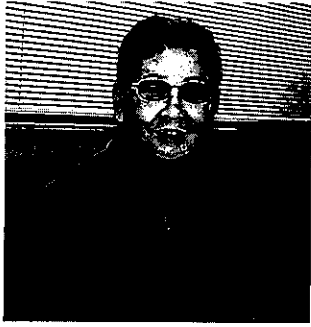
ルについて、同社社長の木村良二さんが紹介した。

★ユニ・チャームのヘルスケアビジネスについて、同社広報部の間鍋安雅さんが説明した。

★実践女子短期大学生活福祉学科助教授の西脇智子さんが、同短大での共用品教育を紹介。（高嶋健夫）

【次回のご案内】

第15回共用品サロンは、6月11日（金）午後6時30分から開催予定です。メインゲストは、バリアフリーコンサルタントの小島直子さん。「口からうんちが出るように手術してください」の著者として知られています。参加申し込みは事務局（TEL：03-5280-0020、FAX：03-5280-2373）まで。



### 鴨志田さんの談話室①

## 今号のお題は「自立的バリアフリー」 人を活かさなくては意味がない

(財)共用品推進機構理事長の鴨志田厚子さんと最初にお会いしたのは、今から7年前のこと。以来、会うたびに「共用品の世界」だけでなく、「デザインの世界」から「人としての生き方」まで、面白く語ってくださるので、とても勉強になる。

日本における工業デザイナーの草分け的存在であり、雲の上の存在なのに、気さくでさっぱりしたお人柄。だから、会った人はみんな、「また話したいな」と思う。鴨志田さんと話したことを、誌面でご紹介していきます。(森川美和)

\*\*\*\*\*  
森 ということで、連載が始まりました。どうぞよろしくお祈りします。  
鴨 はい、こちらこそ。ところで、どんなことを話せばいいの？ 話したいことはいっぱいあるけど……。  
森 それはうれしいです。その中から、今号のお題を決めましょう！  
鴨 「バリアフリー」って言葉について思っていることがあるんだけど。1991年に静岡県デザインセンターで、バリアフリーの推進をテ-

マにシンポジウムが開かれたんです。約150人が数セッションに分かれて参加、その中の「福祉」のセッションに40人ほどが参加してくれてね。

森 バリアフリーという考え方が気になり始めた時期ですね。

鴨 関心が高まりつつあった時期。だけど、みんな「福祉」をどうやって取り上げていいか、わからなかったのよね。最後に参加者から質問を受け付けたんだけど、最初に手をあげた人が言ったのはなんと、「バリアフリーには反対！」(笑)。

森 え〜(絶句)。

鴨 それはびっくりしたけど、その方が言うには、「すべての段差がなくなると、孫が運動不足になる。高齢者は用心して歩けばいい。そこそこバリアがあるのが人生だ」って。当時はまだ「バリアフリー=段差をなくす」程度の認識だったんですね。

森 でも、そんなこと言われたら凍りますよ。なんて答えたんですか？  
鴨 「不便に思っている人たちが今よりもう少し生活しやすくなるために、バリアフリーにするのはいいんじゃないですか？」って答えたのよ。

森 うんうん、たしかに(頷)。

鴨 「自立的バリアフリー」でなくちゃいけないと思っているの。

森 おっ、今号のキーワードが出ましたね！

鴨 「バリアフリー」を考える時に、本人ができることまで取り上げてしまっただけでは意味がない。それぞれの人が持っている力を活かさなきゃね。

森 そう考えると、私たちがやるべきことが見えてくる気がします。

鴨 そう、障害のある人、生活に不便さを感じている人たちが何かをしようとする時に、障壁となるものだけを取り除けばいい。精神面、「心のバリアフリー」についても同じことですよ。

森 それでは、今回は「心のバリアフリー」でいきましょう。

鴨 はい、よろしく(笑)。

\*\*\*\*\*  
〈あとがき〉シンポジウムで「バリアフリー反対！」と言ったのは、染色作家の小山もと子さん。当時70歳代で、脊髄カリエスを患っていた。「あの一言は貴重だった」と鴨志田さん。これをきっかけに、富士市在住の小山さんと交流を深め、女性が亡くなった現在も、同市の人々と交流を続けている。

についても、時に厳しく、親身に教えていただきました。

昼夜問わずどんな時でも、「わからないことがあったら、すぐに行くからね」とおっしゃられた言葉が今でも心の奥に残っています。誰かのために一生懸命になれる人。船越さんはそんな方でした。これからも、教えていただいたことを真摯に受け止め、力を携えて頑張っ参ります。ご冥福を心からお祈り申し上げます。(星川安之、森川美和)

### 機構顧問の船越富士男さん、ご逝去

(財)共用品推進機構発足以来、経理の顧問をしてくださっていた船越富士男さんが5月6日、肺ガンのため亡くなりました。享年76歳。任意団体のE&Cプロジェクトから財団になり、受託事業が増える中、予算、決算などについて一から指導してくださいました。経理ばかりでなく、「公益法人とは何か」

## 他人事に一生懸命になれる人たちと 目標は「プロのつなぎ役」

星川安之



事務局長  
だより

☆……6年目を迎えた機構では今年も、大勢の方々をお迎えしている。なかでも、海外からのお客様が増えている。韓国・仁川市の方々は、「市で共用品のような製品・サービスを集めた展示会を開きたい」と8名ほどで来られ、熱心に機構の事業や共用品・共用サービスについて話を聞いていかれた。

欧州連合(EU)からは、ヨーロッパの規格作成機関にマンデート(指令書)を出す立場のノルベルト・アンセルマー氏が来所。日本の共用品に強い関心を示され、「近いうちに、EUの仲間に共用品推進機構を紹介したい。日本を訪問する際は是非、訪ねるように薦める」といって、帰っていかれた。

一番最近では、カナダに本部を置く国際ナショナル・フェデレーション・エイジング(国際高齢者団体連盟)の事務局長であるジェーン・バラットさんが来所された。彼

女もまた日本における共用品の取り組みに関心と興味を示し、「大いにお互いを活用し合おう」との提案をもらった。

☆……個人的な話で申し訳ないが、機構の前身時代を含めると、共用品に関する仕事をするようになって24年が経過した。この間、星の数ほどの人に出会い、一緒に仕事をさせていただいてきた。

そんな中で、特に強く感じるのは「人と人」、「人と組織」、「組織と組織」、あるいは「国と人」、「国と組織」、「国と国」が繋がることの大切さである。

個人や組織が、そして国が、自らの立場を主張することは大切なことである。だが、もっと大切なことは、相手の主張に耳を貸すことであり、さらには「お互いを理解しよう」という気持ちを持って、話し合いの席に着くことだと感じている。

この仕事を始めた時、「何ととも

てつもない課題を見つけてしまったのか」とほんの少し後悔に似た気持ちを持ったが、それもほんの一時。「これまで後悔しなかった理由を1つだけ挙げろ」と言われたら、「他人の事に一生懸命になっている人」が大勢いたから、と答える。

☆……共用品推進機構になって丸5年が過ぎた。機構では、個人的な能力という点では、自分たちの力量をはるかに超えているような仕事もやらせていただいている。

そんな中で、今後の機構の役割を考える場合、多くの面で能力向上に努めることはもちろん重要であろう。だが同時に、いろいろな人たちが出会い、お互いを考えられる場所となること、「プロフェッショナルなつなぎ役」に成長していくことが大事だと思う。今年度もどうかよろしくお祈りいたします。(★)

## 共用品通信

【イベントのご案内】

○おおた環境・福祉展2004

7月16~18日の3日間、「誰もが使いやすい、モノ・まちをめざして」をテーマに大田区産業プラザで開催。主催は大田区、(財)大田区産業振興協会。入場無料。詳しくは、<http://www.pio.or.jp/event/eco/>。

【高齢者・障害者配慮関連ISO、JISの動き】

○ADF幹事会(4月9日)

○TC159(ISO/IECガイド71)セクターガイド国内委員会(4月13日)

【共用品推進機構の動き】

○愛・地球博日本館バリアフリーサービス委員会(3月23日)

○第2回シニア機器産業の振興に向けた産業基盤調査検討委員会(3月24日)

○第9回評議員会(3月16日)

○第11回理事会(3月24日)

○「バリアフリー2004」(4月22~24日)

大阪・南港のインテックス大阪にて開催の同展に、ADFブースを共同出展し、共用品を展示した。

【報道・マスメディア】

○NHK第1ラジオ(関西圏)、「共用品って、何だろう」指導ガイドブックを紹介(4月20日放送)

【来訪・来所】

○Head of Unit ENTR/G/2 "Standardisation"のMr.Norbert Anselmann(3月16日)

○韓国・仁川市役所メンバー8名(3月19日)

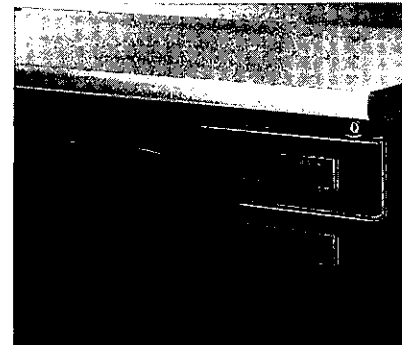
○International Federation on Ageing 事務局長のDr.Jane Barratt(3月23日)

○山口大学教育学部付属光中学校(4月12日)

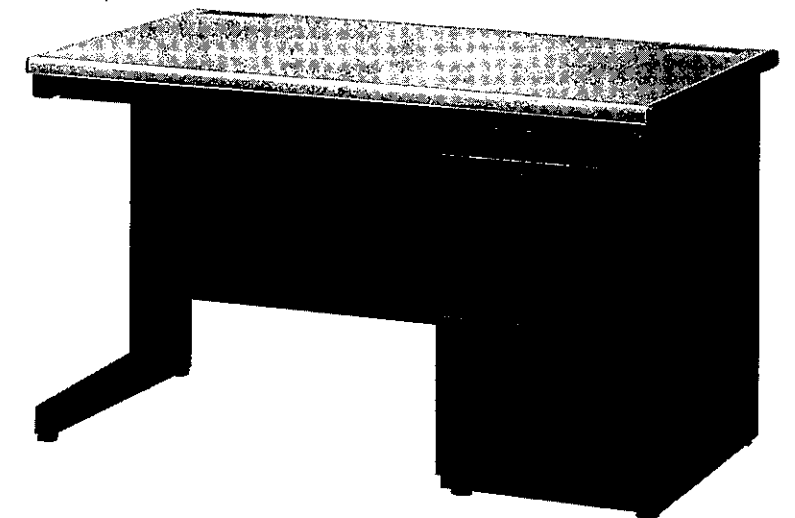




## 内田洋行「FEEDデスク」 誰もが使いやすい“共用仕様”を追求



▽発売時期：2002年10月  
▽寸法：幅120×奥行70×高さ70cm  
▽希望小売価格：5万7645円  
(いずれも、片袖・3段袖タイプの「FEED片袖S-127-3」の場合)  
▽問い合わせ先：お客様相談センター (TEL：0120-077-266)



(写真は「FEED片袖S-127-2P」)

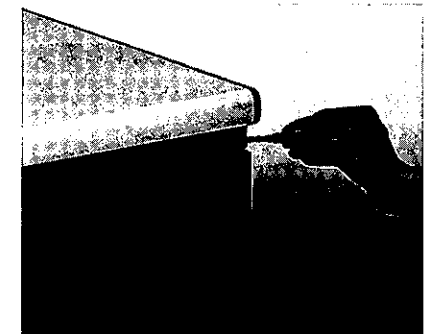
### キメ細やかな配慮で、オフィス家具市場に新風

オフィス家具分野で、ユニバーサルデザイン設計を初めて本格的に打ち出したデスクである。発売から短期間で内田洋行の主力商品に成長。日経産業新聞編「市場占有率2004年版」の記述によると、同社のシェア向上に大いに貢献した。

99年に発足し、2001年に正式組織となった社内横断的な「UD推進チーム」の老山健環境対策室長、

開発2課の森博也氏らが企画・開発を担当。前モデルから継承した高さ調整機能に加え、①大型の取っ手とラッチレバーによって開閉しやすくした引き出し (=写真左)、②手触りだけでも位置がわかるように配慮した鍵穴 (=同右) —— など、細かい点まで神経が行き届いている。

共用品推進機構理事長の鴨志田厚子さんがアドバイザーとなっている



ほか、共用品ネットのメンバーもモニターとして開発に協力した。

(高嶋健夫)

作る人と使う人の共用品情報誌

### インクル 第30号

2004 (平成16) 年 5月25日発行  
"Incl." vol.6 no.30

©The Accessible Design Foundation of Japan  
(The Kyoyo-Hin Foundation), 2004  
隔月刊、奇数月に発行

一般頒価 1部1000円

(但し、個人・法人賛助会員については、購読料は年会費の中に含まれています)

※視覚に障害のある方など、墨字版がご利用できない方にはTXTファイルのフロッピーディスクを提供しています。必要のある方は、事務局までお申し出ください。

編集・発行 (財)共用品推進機構  
郵便番号 101-0064  
東京都千代田区猿樂町2-5-4 OGAビル2F  
電話：03-5280-0020  
ファクス：03-5280-2373

Eメール：jimukyoku@kyoyohin.org  
ホームページURL：http://kyoyohin.org/

発行人 鴨志田厚子  
事務局 星川 安之

森川 美和  
凌 竜也

金丸 淳子  
布橋 智

編集長 高嶋 健夫  
執筆・協力 後藤 芳一

(五十音順) 小畑 一実

関口 秀之  
永井 武志  
中野奈津美  
星川加奈子  
牧内 智子  
山本百合子

印刷・製本 ベスト・イーグル(株)/三栄印刷(株)

本誌の全部または一部を視覚障害者やこのままの形では利用できない方々のために、非営利の目的で点訳、音訳、拡大複写することを承認いたします。その場合は、(財)共用品推進機構までご連絡ください。

上記以外の目的で、無断で複写複製することは著作権者の権利侵害になります。